

『太平広記』 訳注

—— 卷四百二十二「龍」五(上) ——

太平広記読書会

本稿は前稿「『太平広記』 訳注 一 卷四百二十一「龍」四(下) ——」(『国語国文学研究』 第五十号 二〇一五年) に続き、『太平広記』の卷四百二十二前半三話の訳注である。『太平広記』は北宋の初めに編纂された小説を集めた類書である。本書は日本の説話文学に影響を与えたことでも知られており、その訳注を行うことは今後の中国文学・日本文学双方の研究に資するところが大きいと考える。

またこれは平成十七年七月十四日より始まった『太平広記』読書会の成果の一部でもある。当読書会は熊本大学所属の教員を中心にして、他大学の教員や学生、社会人など、所属の枠にとらわれず広く集まった有志による会であり、今後も『太平広記』を読み進めていく予定である。

前稿で報告した十周年に続き、本研究会は今年度とうとう開催回数二百回を越えた。「無理をせず、先を急がず」を会の方針としているが、これだけの長い年月継続できたことは、まことに希有なことと感じる。関係の方々には御礼申し上げたい。

底本、参考文献、及び字体については「『太平広記』 訳注 一 卷四百十八「龍」一(上) ——」(『国語国文学研究』 第四十三号 二〇〇八年) 及び「『太平広記』 訳注 一 卷四百二十一「龍」三(下) ——」(『国語国文学研究』 第四十八号 二〇一三年) に記した通りである。作品番号は前稿の続きとする。

○33 「許漢陽」

〔本文〕

許漢陽、本汝南人也。貞元中、舟行於洪饒間、日暮、江波急。尋小浦路入、不覺行三四里、到一湖中。雖廣而水纔三二尺。又北行一里許、見湖岸竹樹森茂、乃投以泊舟。

漸近、見亭宇甚盛。有二青衣雙鬟方鵝、素面如玉、迎舟而笑。漢陽訝之、而調以游詞。又大笑、復走入宅。

漢陽束帶、上岸投謁。未行三數步、青衣延入宅內廳。揖坐、云、「女郎易服次。」須臾、青衣命漢陽入中門、見滿庭皆大池。池中荷芰芬芳、四岸斐如碧玉。作兩道虹橋、以通南北。北有大

閣。上階、見白金書曰「夜明宮」。四面奇花果木、森聳連雲。青衣引上閣一層、又有青衣六七人、見者列拜。

又引第二層、方見女郎六七人。目未嘗睹。皆拜問所來。漢陽具述不意至此。女郎揖坐訖、青衣具飲食。所用皆非人間見者。

食訖命酒。其中有奇樹高數丈。枝幹如梧、葉似芭蕉。有紅花滿樹未吐、盡如杯。正對飲所。一女郎執酒、命一青衣捧一鳥如鸚鵡、置飲前欄干上、叫一聲。而樹上花一時開、芳香襲人。每花中有美人長尺餘。婉麗之姿、掣曳之服、各稱其質、諸樂弦管盡備。其人再拜、女郎舉酒。衆樂俱作、蕭蕭冷冷、竇（陳校本竇作杏。）如神仙。

纔一巡、已夕、月色復明。女郎所論、皆非人間事、漢陽所不測。時因漢陽以人事辯之、則女郎一無所酬答。

歡飲至三更、筵宴已畢。其樹花片片落池中、人亦落、便失所在。一女郎取一卷文書以示。漢陽覽之、乃「江海（陳校本海作女）賦」。女郎令漢陽讀之、遂爲讀一遍。女郎又請自讀一遍、命青衣收之。一女郎謂諸女郎、兼語漢陽曰、「有『感懷』一章、欲請誦之。」女郎及漢陽曰、「善。」乃吟曰、

「海門連洞庭、每去三千里。

十載一歸來、辛苦瀟湘水。」

女郎命青衣取諸卷、兼筆硯、請漢陽與錄之。漢陽展卷、皆金花之素。上以銀字札之、卷大如拱斗。已半卷書過矣。觀其筆、乃白玉爲管、研乃碧玉。以玻璃爲匣、研中皆研銀水。寫畢、令以漢陽之名押之。展向前、見數首、皆有人名押署。有名「仲方」

者、有名「巫」者、有名「朝陽」者、而不見姓。

女郎遂收素卷。漢陽曰、「有一篇欲奉和。擬繼此可乎。」女郎曰、「不可。此亦每歸呈父母兄弟、不欲雜爾。」漢陽曰、「適以弊名押署、復可乎。」曰、「事別。非君子所論。」

四更已來、命悉收拾。揮霍次、一青衣曰、「郎可歸舟矣。」漢陽乃起。諸女郎曰、「忻此旅泊接奉、不得鄭重耳。」恨恨而別。歸舟忽大風、雲色陡暗、寸步黯黑。

至平明、觀夜來飲所、乃空林樹而已。漢陽解纜、行至昨晚灑口江岸人家、見十數人。似有非常、因泊舟而訊。人曰、「江口溺殺四人。至三更後、却撈出、三人已卒。其一人、雖似死而未甚。有巫女以楊柳水灑拂禁呪、久之能言曰、『昨夜水龍王諸女及姨姊妹六七人歸過洞庭、宵宴於此、取我輩四人作酒。掾客少、不多飲。所以我却得來。』」

漢陽異之、乃問曰、「客者謂誰。」曰、「一措大耳。不記姓名。」又云、「青衣言、『諸小娘子苦愛人間文字、不可得。常欲請一措大文字而無由。』」又問今在何處、「已發舟也。」漢陽乃念昨宵之事、及「感懷」之什、皆可驗也。漢陽默然而歸舟。覺腹中不安、乃吐出鮮血數升。知悉以人血爲酒爾。三日方平。（出「博異志」）

〔訓読〕

許漢陽は、本汝南の人なり。貞元中、洪饒の間を舟行するに、日暮れ、江波急なり。小浦路を尋ねて入るに、覚えずして行くこと三四里、一湖中に到る。広しと雖も水纔かに三三尺。又た北に行くこと一里許、湖岸の竹樹の森茂するを見、乃ち

投じて以て舟を泊めんとす。

漸く近づくに、亭宇の甚だ盛んなるを見る。二青衣の双鬘方に鴉のごとく、素面玉の如き有り、舟を迎へて笑ふ。漢陽之を訝るも、調るに游詞を以てす。又大いに笑ひ、復た走りて宅に入る。

漢陽東帯し、岸に上りて投調す。未だ行くこと三数歩ならざるに、青衣宅の内庁に延入す。揖し坐するに、云ふ、「女郎服を易ふるの次なり」と。須臾にして、青衣漢陽に命じて中門に入らしめ、滿庭皆大池なるを見る。池中の荷芝芬芳として、四岸斐たること碧玉の如し。兩道の虹橋を作り、以て南北を通ず。北に大閣有り。階を上るに、白金の書の「夜明宮」と曰ふを見る。四面の奇花果木、森のごとく聳え雲に連なる。青衣引きて閣を上ること一層、又た青衣六七人有り、見る者列なり拜す。

又た引くこと第二層、方めて女郎六七人に見ゆ。目に未だ嘗て睹ず。皆拜して來たる所を問ふ。漢陽具に意はずして此に至るを述ぶ。女郎揖し坐すること訖はり、青衣飲食を具ふ。用ふる所皆人間に見る者に非ず。食訖はりて酒を命す。其中に奇樹の高さ数丈なる有り。枝幹梧の如く、葉芭蕉に似たり。紅花の樹に滿つるも未だ吐かざる有り、盞杯の如し。飲む所に正対す。一女郎酒を執り、一青衣に命じて一鳥の鸚鵡の如きを捧げ、飲前の欄干の上に置き、叫ばしむること一声。而して樹上の花一時に開き、芳香人を襲ふ。每花中に美人

の長尺余なる有り。婉麗の姿、掣曳の服、各おの其の質に称ひ、諸樂弦管尺く備はる。其の人再拜し、女郎酒を拵ぐ。衆樂俱に作し、蕭蕭泠泠、響たること神仙の如し。

纔かに一巡するに、已に夕べにして、月色復た明るし。女郎の論ずる所は、皆人間の事に非ずして、漢陽の測らざる所なり。時に漢陽の人事を以て之を辯するに困りて、則ち女郎一も酬答する所無し。

飲飲して二更に至り、筵宴已に畢はる。其の樹花片片として池中に落ち、人も亦た落ち、便ち在る所を失ふ。一女郎一卷の文書を取りて以て示す。漢陽之を覽るに、乃ち「江海の賦」なり。女郎漢陽をして之を読ましめ、遂に為に読むこと一遍。女郎又た請ひて自ら読むこと一遍、青衣に命じて之を収めしむ。一女即ち諸女郎に謂ひ、兼ねて漢陽に語りて曰く、「感懷」一章有り、之を誦せんことを請はんと欲す」と。女郎及び漢陽曰く、「善し」と。乃ち吟じて曰く、「海門洞庭に連なり、毎に去ること三千里。」

十載一たび帰り來たり、辛苦す瀟湘の水」と。

女郎青衣に命じて諸卷と、兼ねて筆硯とを取らしめ、漢陽に請ひて与に之を録せしむ。漢陽卷を展ぶるに、皆金花の素なり。上に銀字を以て之に札し、卷は大なること拱斗の如し。已に半卷書過す。其の筆を觀るに、乃ち白玉もて管と為し、硯は乃ち碧玉なり。玻璃を以て匣と為し、硯中は皆研銀水なり。写し畢はり、漢陽の名を以て之に押せしむ。向前を展べ、数首

を見るに、皆人名の押署する有り。名「仲方」なる者有り、名「巫」なる者有り、名「朝陽」なる者有るも、而れども姓を見ず。

女郎遂に収めんとして巻を索む。漢陽曰く、「一篇有りて和し奉らんと欲す。此に継がんと擬するは可なるか」と。女郎曰く、「可ならず。此亦た帰る毎に父母兄弟に呈すれば、雑ふるを欲せざるのみ」と。漢陽曰く、「適に弊名を以て押署するは、復た可なるか」と。曰く、「事別なり。君子の論る所に非ず」と。

四更已来、命じて悉く收拾せしむ。揮霍の次、一青衣曰く、「郎舟に帰るべし」と。漢陽乃ち起つ。諸女郎曰く、「此の旅泊の接奉を忻ぶも、鄭重なるを得ざるのみ」と。恨恨として別る。舟に帰れば忽ち大風ありて、雲色陡かに暗く、寸歩も黯黒なり。

平明に至り、夜来飲みし所を觀れば、乃ち林樹を空しくするのみ。漢陽纜を解き、行きて昨晩の濫口江岸の人家に至るに、十数人を見る。非常有るに似、因りて舟を泊めて訊ぬ。人曰く、「江口四人を溺殺す。二更の後に至り、却擄して出だすも、三人已に卒せり。其の一人は、死するに似たりと雖も未だ甚だしからず。巫女楊柳の水を以て灑扨禁呪するに、之を久しくして能く言ひて曰く、『昨夜水竜王の諸女及び姨姉妹六七人帰りに洞庭に過ぎらんとし、此に宵宴するに、我が輩四人を取りて酒を作る。掾客少くして、多くは飲まず。所以

に我却つて来たるを得たり』と。

漢陽之を異とし、乃ち問ひて曰く、「客なる者は誰をか謂ふ」と。曰く、「一措大なるのみ。姓名を記さず」と。又た云ふ、「青衣言ふ、『諸小娘子苦だ人間の文字を愛するも、得べからず。常に一措大の文字を請はんと欲するも由無し』と。又た今何の処に在るかを問ふに、『已に舟を發するなり』と。漢陽乃ち昨宵の事、及び「感懷」の付を念ふに、皆驗すべきなり。漢陽黙然として舟に帰る。腹中の安からざるを覺え、乃ち鮮血を吐き出だすこと数升。悉く人血を以て酒と為すを知るのみ。三日にして方めて平らぐ。

〔語注〕

○許漢陽 未詳。兩『唐書』には見えない。○汝南 現在の河南省汝南県の西。○洪饒閭 「洪」は洪州で現在の江西省北部一帯、「饒」は饒州で現在の江西省北東部一帯。二州は鄱陽湖を挟んで隣り合っている。○虹橋 虹のような形に曲がった橋。○夜明宮 他書未見。宮殿の名と思われるが、未詳。今村与志雄『唐宋伝奇集』下（岩波文庫 岩波書店 一九八八年）は「夜間、光を發する枕を夜明枕（『開元天寶遺事』下）といひ、夜、光を發する宝珠を、夜明珠（王嘉『拾遺記』二）といひ、夜明るく照し出す犀を夜明犀（蘇鶻『杜陽雜編』中）といふ用例から推して、夜間、燈火を用いずに光を發して明るい宮殿なのである。それとも月の光が明るいからか。」と注する。○盞 はち。ここでは花のつぼみのことをいうか。周振甫主編

『白話太平広記』（中州古籍出版社 一九九三年）は「花雷有杯子大小。」と訳し、丁玉琤等主編『白話太平広記』（河北教育出版社 一九九五年）は「繁密の舊雷都像杯子那么大。」と訳す。また王汝濤主編『太平広記選』（齊魯書社 一九八〇年）は「（树上的红花）像杯子那么大。雷、盛貌、引伸为丰满。」と注し、王貴元・陳亜軍・曾鳳主編『太平広記故事集』（北京廣播出版社 一九九九年）は「雷…兴盛的样子、这里指大。」と注しており、両者とも雷を大きい、盛んの意とする。ここでは前者に従い、雷のことと考えておく。なお『博異志』（中華書局 一九八〇年）はこの句を「大如斗雷」に作る。○睿 あなぐら、ここではそのように奥深いことを言うか。○三更 午後九時から午後十一時頃。夕暮れから夜明けまでの一夜を五等分した中で、二番目の二時間に相当する。○江海賦 未詳。前掲の今村氏訳は「文選」（一一二）の木華の「海賦」と郭璞の「江賦」とをさすか。」と注する。○感懷一章 この詩は『全唐詩』巻八百六十四「神」に童女「感懷詩」として収められている。ただしこの一首の詩意は解しがたいところがある。○海門 河口。○洞庭 湖南省北部にある中国最大の淡水湖。李朝威「柳毅伝」（『太平広記』巻四百十九）の舞台としても知られる。○瀟湘水 「瀟」は瀟水で、湖南省寧遠県の九疑山附近に源を發し、湖南省永州市で湘水に合流する川。「湘」は湘水で、広西チワン族自治区に發し、瀟水を合わせて洞庭湖に注ぐ川。但し元は二つの川の名を合わせたものではなく、「瀟なる湘」、清ら

かで豊かな湘水という美称であつたらしい。舜の二妃娥皇と女英が身を投げて水神となつた悲劇の地としても知られ、また沈亜之「湘中怨解」（『沈下賢文集』巻二）には「湘中蛟宮之娣」が登場するなど、水神・竜神と縁のある地でもある。浅見洋二「閨房のなかの山水、あるいは瀟湘について——晚唐五代詞における風景と絵画」（『集刊東洋学』第六十七号 一九九二年）では「娥皇・女英の伝説は、愛する者との別離を餘儀なくされた悲劇の原型とも言うべきものを伝えている。その記憶を帯びた瀟湘の地が、唐代には別離の悲哀と結びついた文学的トポスを形成していることについては、敢えて詳しく述べるには及ばないだろう。」と指摘されている。本句の「辛苦」はこのような悲哀のイメージを踏まえてのものか。この地のイメージについては、松浦友久編『漢詩の事典』（大修館書店 一九九九年）、植木久行編『中国詩跡事典』（研文出版 二〇一五年）も参照。○玻璃 玉の名。水晶のこと。水玉ともいう。○研銀水 未詳。銀を磨つて溶かした水か。○押箸 末尾に署名すること。○有名仲方者、有名巫者、有名朝陽者 暗に誰か特定の人物を指すのかも思われるが、未詳。○四更 午前一時から午前三時頃。夕暮れから夜明けまでの一夜を五等分した中で、四番目の二時間に相当する。○揮霍 はやいさま。また、激しいさま。前掲の今村氏訳は「指揮」の意と解し、「娘たちがその指図をしていたとき」と訳す。○灑 川の隈。○掾客少 義未詳。「掾」は地方の下役人の意。宴席に参加した下役人や客が少なかった

ので、の意か。『博異志』（中華書局 一九八〇年）は「縁客少」（客の少きに縁りて）に作る。○措大 失意の貧しい読書人。

○『博異志』 晩唐・鄭還古が編纂した小説集。鄭還古は谷神子と号した。現行本は一卷で十話しか収められていないが、『太平広記』には三十数話が収められている。この話は「菟女の詩会——許漢陽」と題して今村与志雄『唐宋伝奇集』下（岩波文庫 岩波書店 一九八八年）に収められている。

〔訳文〕

許漢陽はもと汝南の人である。貞元年間（七八五〜八〇五）、洪州・饒州の辺りを舟で移動していた時、日が暮れて波が激しくなってきた。細い水路を探して入っていくと、気がつかない内に三、四里（一里＝五五九 八m）進んでおり、ある湖にたどり着いた。広くはあつたが深さは二、三尺（一尺＝三二 一cm）しかなかった。さらに北に一里（五五九 八m）程行くと、湖の岸に竹が繁っているのが見えたので、そこに舟を停泊させることにした。

近づくにつれて、立派な建物があるのが見えてきた。烏のように真っ黒い総角で玉のように白い顔の侍女が二人、舟を出迎えて笑っていた。漢陽は訝しく思ったが、軽口で戯れかかった。侍女達はまた大いに笑い、走って邸宅の中に入って行った。

漢陽は衣服を整え、岸に上がって拝謁を願ひ出た。まだ数歩も歩かない内に、侍女が漢陽を座敷に招き入れた。漢陽がお辞儀をして座ると、侍女は「御嬢様は今お召し替え中です。」と

言った。しばらくすると、侍女は漢陽を屋敷の奥へと続く門に入らせた。そこは庭一面が大きな池であった。池中には蓮が長い香りを漂わせ、四方の岸は碧玉のように美しかった。池には虹橋を二本、南北に渡していた。北には大きな樓閣があった。階段を登ると、白金で「夜明宮」と記されているのが見えた。辺りには珍しい花や果樹が森のように茂って雲に届かんばかりにそびえ立っていた。侍女は漢陽を連れて樓閣を一階登ると、さらに侍女が六、七人おり、漢陽を見た者は並んで挨拶をした。

さらに二階登ると、やっと六、七人の女性に会えた。見たこともないような美しさであった。皆挨拶をして漢陽の来意を尋ねた。漢陽は思いがけずにここに来てしまったことを詳しく述べた。女性がお辞儀をして座ると、侍女は食べ物と飲み物を用意した。食器はどれも人界で見かけるような物ではなかった。

食事が終わると酒を持ってくるように命じた。庭には高さ数丈（一丈＝三 一一m）の珍しい樹が植わっていた。枝や幹は梧桐のようだが、葉は芭蕉のようであった。樹には杯のような紅い花の蕾が一杯付いていたがまだ咲いていなかった。丁度酒を飲んでゐる所の正面にあった。女性の一人が酒を手にして侍女に命じ、鸚鵡のような鳥を連れて来て酒を飲んでゐる目の前の欄干の上に置かせ、一声啼かせた。すると樹上の花が一斉に開き、香りが人々に届いてきた。どの花の中にも身の丈一尺（三一 一cm）余りの美女が居た。たおやかな姿、引きずっている衣、どれも美女達の美しさにかなうものであり、あらゆる楽器

類が尽く備わっていた。その美女達が再拜すると、女性は酒を掲げた。様々な音色が一斉に奏でられ、その曲は物寂しげで清らか、仙界の曲のように奥深いものだった。

酒が一巡りしたばかりなのにもう日が暮れており、月が明るく輝いていた。女性の語ることはどれも人界の話ではなく、漢陽には理解できなかった。時に漢陽が人界の考えで解釈したが、女性は一言も答えなかった。

楽しく飲む内に二更（午後九時過ぎ頃）になり、宴もお開きとなった。樹の花はひらひらと池に散り落ち、人もまた落ちてしまい、ぱっと姿が見えなくなった。女性の一人が一卷の書を取り出して漢陽に示した。見ると「江海の賦」であった。女性が漢陽にこれを読むように言ったので、漢陽は一通り読んだ。

女性は今度は自分が読みたいと言い、読み終わると侍女に片付けさせた。女性の一人が他の女性達と漢陽に向かって、「感懐」一章を誦したいのだけれど。」と言うと、女性達と漢陽は「宜しいでしょう。」と答えた。そして女性は吟詠した。

「河口から洞庭湖まで、その距離は三千里。」

十年に一度帰ってくると、瀟湘の辺りで辛くなる。」

女性は侍女に命じて巻物と筆、硯を持ってこさせ、漢陽に書き留めるように頼んだ。漢陽が巻物を広げると、どれも金の模様が付いた白絹であった。上に銀で字が書かれており、巻物の大きさは円形の升ほどであった。すでに巻物の半分は書き終わっていた。その筆を見てみると、何と軸は白玉できてお

り、硯は碧玉、水晶で箱を作り、硯に入っているのは銀を磨った水であった。書き終わると、漢陽の名を署名させた。巻物の前の方を広げて数首を見てみると、どれも書名がされていた。「仲方」という名、「巫」という名、「朝陽」という名があったが、どれも姓は記されていないかった。

女性はそのまま片付けようとして巻物を求めた。漢陽「一首唱和させていただけたく思うのですが、この後に続けて書いても宜しいでしょうか。」女性「いけません。これは帰るたびに両親や兄弟達に見せるものですから、混ぜるのは嫌なのです。」漢陽「でしたら、つい先ほど私めの名前を署名したのは宜しいのですか。」女性「それは話が違います。あなたの理解できることではありません。」

四更（午前一時過ぎ頃）になると、全部片付けるよう命じた。慌ただしく片付けている時、侍女が「あなたは舟にお帰りになっても宜しいですよ。」と言った。漢陽はそこで立ち上がった。女性達は「この度は旅先にてあなたにお会いできたことはいはれしいのですが、鄭重なおもてなしができませんでした。」と言い、名残惜しげに別れた。漢陽が舟に戻ると突然大風が吹いて、雲が急に暗く立ちこめ、一寸先まで真っ暗になった。

夜が明けて昨夜酒を飲んでいたところを見てみれば、人気の無い林があるだけだった。漢陽は舟のともづなを解き、昨晚の川の隈のところの岸辺の人家に行つて見ると、十数人が居た。何事かあったようなので、舟を停泊させて尋ねた。村人は「河

口で四人が溺れた。二更(午後九時過ぎ頃)になって川から引つ張り出したんだが、三人はもう死んでいた。残りの一人は死んだように見えたがまだ息があった。そこで巫女が柳の枝を水に浸して振りかけて呪文を唱えた。しばらくすると溺れた者は話せるようになり、『昨夜、竜王の娘と従姉妹達六、七人が洞庭湖への里帰りの途中にここで夜の宴を設け、我々四人を捉えて酒にした。しかし参加した下役人や客が少なかったので、あまり飲まなかった。だから自分は帰ってくる事ができたんだ。』と言うんだ。」とのことだった。

漢陽は不思議に思い、「客とは一体誰のことか。」と尋ねた。溺れた者は「貧乏書生だが、名前は分からない。」と言い、更に「侍女が『御嬢様は人界の書を大層気に入っておいでですが、手に入りません。いつも書生の書を手に入れたいとお思いますが、その手段がありません。』と言っていた。」と言った。漢陽がさらにその書生は今どこに居るか尋ねると、溺れた者は「もう舟で行ってしまつた。」と言った。漢陽は昨夜の事と「感懐」の詩篇を思い返してみると、どれも符合した。漢陽は黙つて舟に帰ると、腹の中が落ち着かないような気がして、何と鮮血を数升(一升〇・五九四四一)吐き出し、全て人の血を酒としていたことに気がついた。三日経つてやっと平癒したのであつた。

○34 「劉禹錫」

〔本文〕

唐連州刺史劉禹錫、貞元中、寓居滌澤。首夏獨坐林亭、忽然聞大雨、天地昏黑。久方開霽、獨亭中杏樹、雲氣不散。禹錫就視樹下、有一物形如龜鼈、腥穢頗甚、大五斗釜。禹錫因以瓦礫投之、其物即緩緩登階、止于檐柱。禹錫乃退立於牀下、支策以觀之。其物仰視柱杪、款以前趾、抉去半柱。因大震一聲、屋瓦飛紛亂下。亭內東壁、上下罅裂丈許。先是亭東紫花苜蓿數畝。禹錫時於裂處、分明遙見。

雷既收聲、其物亦失。而東壁之裂、亦已自吻合矣。禹錫亟視之、苜蓿如故、壁曾無動處。(出『集異記』)

〔訓読〕

唐の連州刺史劉禹錫は、貞元中、滌沢に寓居す。首夏独り林亭に坐するに、忽然の間に大いに雨ふり、天地昏黒なり。久しくして方めて開霽するも、独り亭中の杏樹のみ、雲氣散らず。禹錫就きて樹下を視るに、一物有り形龜鼈の如く、腥穢なること頗る甚だしく、大なること五斗の釜のごとし。禹錫因りて瓦礫を以て之に投ずれば、其の物即ち緩緩として階を登り、檐柱に止まる。禹錫乃ち退きて牀下に立ち、策を支持えて以て之を觀る。其の物仰ぎて柱杪を視、款くに前趾を以てし、半柱を抉り去る。因りて大いに一声を震るへば、屋瓦飛紛亂下す。亭内の東壁、上下に罅裂すること丈許。是より先に亭の東に紫花の苜蓿數畝あり。禹錫時に裂けし処より、

分明に遙かに見る。

雷既に声を収むれば、其の物も亦た失ふ。而して東壁の裂も、亦た已に自ら吻合す。禹錫すみや亟かに之を視れば、苜蓿故の如く、壁曾て動く処無し。

〔語注〕

○連州 現在の広東省清遠市の北東部一帯。○劉禹錫 七七二～八四二。中山の人。字は夢得。貞元九年（七九三）柳宗元と同時に進士に及第した。王叔文の党派に連なって重責を担ったが、永貞元年（八〇五）、叔文の失脚後、朗州司馬に左遷された。元和十年（八一五）、ようやく都に召還されたが再び連州刺史に左遷されるなど地位が安定しなかったが、最終的には太子賓客に遷り、檢校礼部尚書を加えられた。著に『劉夢得文集』三十卷・外集十卷がある。『旧唐書』卷百六十、『新唐書』卷百六十八にそれぞれ伝がある。郁賢皓『唐刺史考全編』（安徽大學出版社 二〇〇〇年）に拠れば、劉禹錫が連州刺史であったのは元和十年（八一五）から元和十四年（八一九）のことであるので、この話の舞台である貞元年間（七八五～八〇五）はまだ左遷される前であり、連州刺史ではない。ちなみに李劍国『唐五代志怪伝奇叙録』（南開大學出版社 一九九三年）は薛用弱『集異記』の成立を長慶四年（八二四）頃としており、この年に劉禹錫は連州刺史の後、夔州刺史から和州刺史に遷っている。○榮澤 現在の河南省鄭州市の北東。○苜蓿 ムラサキウマゴヤシ。アルファルフアとも呼ばれる。夏に濃紫色から白色の蝶

形の花を付ける。○『集異記』中唐・薛用弱撰。主に隋唐の間の奇事を記している。元三卷であったようだが、現在伝わるのは二巻本と一巻本のみ。『太平広記』には八十三条が引用されている。なお六朝小説にも郭季産『集異記』『古小説鈎沈』所収）があるが、本書と関連は無い。この話は二巻本の補編に収められている。

〔訳文〕

唐の連州刺史の劉禹錫は、貞元年間（七八五～八〇五）、榮沢に寓居していた。夏の初め、林の中の亭に一人座っていると、突然大雨が降って、天地が真つ暗になった。しばらくするとやつと晴れたが、亭のところの杏の樹にだけ、雲気が散らずに残っていた。禹錫が樹の側に行つて見てみると、鼈ちゅうばんのようなものがいた。大層生臭く、大きさは五斗（二・九七二）の釜ほどであった。禹錫がそこで瓦礫を投げつけると、その物はすぐにゆっくりと階を登り始め、廂の柱のところまで止まった。禹錫はそこを離れて寝台の側に立ち、杖をついて眺めていた。その物は柱の上端を仰ぎ見ると、前足で柱を叩き、柱の半分をえぐり取った。そして大声を発すると、屋根瓦ががらがらと落ちてきた。亭の東の壁も、上下に一丈（三・一一m）程の亀裂が走った。それ以前、亭の東に紫の花を咲かせたうまごやしの畑が数畝（一畝＝五・八〇三二六a）あったのだが、禹錫はその時、壁の裂け目からうまごやしの畑がはつきりと見えた。

雷の音が止むと、その物も姿を消していた。そして東の壁の

亀裂も自然にふさがっていた。禹錫はすぐに見てみたが、うまごやしは元通りで、壁にも動いた形跡は全く無かった。

○35「周邯」

〔本文〕

貞元中、有處士周邯。文學豪俊之士也。因彝人賣奴、年十四五、視其貌甚慧黠、言善入水、如履平地。令其沈潛、雖經日移時、終無所苦。云、「蜀之溪壑潭洞、無不屈也。」邯因買之、易其名曰水精。異其能也。

邯自蜀乘舟下峽。抵江陵、經瞿塘艷瀨。遂令水精沈而視其遠。水精入、移時而出。多探金銀器物、邯喜甚。每艤船於江潭、皆令水精沈之、復有所得。

沿流抵江都、經牛渚磯。古云最深處。是温嶠熱犀照水怪之濱。又使沒入、移時復得寶玉。云、「甚有水怪、莫能名狀。皆怒目戟手、身僅免禍。」因茲邯亦至富贍。

後數年、邯有友人王澤、牧相州。邯適河北而訪之。澤甚喜、與之遊宴、日不能暇。因相與至州北隅八角井。天然盤石、而蹙成八角焉。闊可三丈餘。日暮煙雲蒼鬱、漫衍百餘步。晦夜、有光如火紅射出千尺、鑑物若畫。古老相傳云、「有金龍潛其底。或充陽禱之、亦甚有應。」澤曰、「此井應有至寶。但無計而究其是非耳。」邯笑曰、「甚易。」遂命水精曰、「汝可與我投此井到底、看有何怪異。澤亦當有所賞也。」水精已久不入水、忻然脫衣沈之。

良久而出、語邯曰、「有一黃龍極大。鱗如金色、抱數顆明珠熟寐。水精欲劫之、但手無刃、憚其龍忽覺、是以不敢觸。若得一利劍、如龍覺、當斬之無憚也。」邯與澤大喜。澤曰、「吾有劍、非常之寶也。汝可持往而劫之。」水精飲酒伏劍而入。

移時、四面觀者如堵、忽見水精自井面躍出數百步。續有金龍亦長數百尺。爪甲鋒穎、自空擎攫水精、却入井去。左右慄慄、不敢近睹。但邯悲其水精、澤恨失其寶劍。

逡巡、有一老人。身衣褐裘、貌甚古朴。而謁澤曰、「某土地之神。使君何容易而輕其百姓。此穴金龍、是上玄使者、宰其瑰璧、澤潤一方。豈有信一微物、欲因睡而劫之。龍忽震怒、作用神化、搖天關、擺地軸、搥山岳而碎丘陵、百里爲江湖、萬人爲魚鼈、君之骨肉焉可保。昔者鍾離不愛其寶、孟嘗自返其珠。子不之效、乃肆其貪婪之心、縱使猾叟之徒、取寶無憚。今已啖其軀而鍛其珠矣。」澤赧恨、無詞而對。又曰、「君須火急悔過而禱焉。無使甚怒耳。」老人俟去。澤遂具牲牢奠之。(出「傳奇」)

〔訓詁〕

貞元中、処士周邯有り。文學豪俊の士なり。彝人の奴を売るに因るに、年十四五、其の貌を視れば甚だ慧黠にして、善く水に入りて、平地を履むが如しと言ふ。其をして沈潜せしむれば、日を経時を移すと雖も、終に苦しむ所無し。云ふ、「蜀の溪壑潭洞、屈らざる無きなり」と。邯因りて之を買ひ、其の名を易へて水精と曰ふ。其の能を異とすればなり。

邯蜀より舟に乗りて峽を下る。江陵に抵らんとして、瞿塘

艶瀕を經。遂に水精をして沈みて其の遠遠を視しむ。水精入りて、時を移して出づ。多く金銀器物を探り、邯喜ぶこと甚だし。船を江潭に艤ぐ毎に、皆水精をして之に沈ましめ、復た得る所有り。

流れに沿ひて江都に抵らんとし、牛渚磯を經たり。古より最も深き処と云ふ。是温嶠の犀を熱きて水怪を照らすの浜なり。又た没入せしむるに、時を移して復た宝玉を得。云ふ、「甚だ水怪有り、能く名状する莫し。皆目を怒らせ手を戟にし、身僅かに禍を免れたり」と。茲に因りて邯亦た富贍に至る。

後数年、邯に友人の王沢有り、相州に牧たり。邯河北に適きて之を訪ぬ。沢甚だ喜び、之と遊宴し、日として暇ある能はず。因りて相与に州の北隅の八角井に至る。天然の盤石にして、而して甃八角を成す。闊さ三丈余可。旦暮に煙雲霧鬱として、百余歩に漫衍す。晦夜、光の火の如き有りて紅射し出づること千尺、物を鑑ること昼の若し。古老相伝へて云ふ、「金竜有りて其の底に潜む。或いは亢陽に之に禱らば、亦た甚だ応有り」と。沢曰く、「此の井応に至宝有るべし。但だ計の其の是非を究むる無きのみ」と。邯笑ひて曰く、「甚だ易し」と。遂に水精に命じて曰く、「汝我が与に此の井に投じて底に到り、何の怪異有るかを看るべし。沢も亦た当に賞はる所有るべきなり」と。水精已に久しく水に入らざれば、忻然として衣を脱ぎて之に沈む。

良や久しくして出で、邯に語りて曰く、「一黄竜の極めて大

なる有り。鱗金色の如く、数顆の明珠を抱きて熟寐す。水精之を劫はんと欲するも、但だ手に刃無ければ、其の竜の忽ち覚めんことを憚り、是を以て敢へて触れず。若し一利劍を得ば、如し竜覚むるも、当に之を斬りて憚る無かるべきなり」と。邯と沢と大いに喜ぶ。沢曰く、「吾に劍有り、非常の宝なり。汝持ち往きて之を劫ふべし」と。水精酒を飲み劍を伏して入る。時を移して、四面の觀る者堵の如く、忽ち水精の井面より躍出すること数百歩なるを見る。続いて金竜有り亦た長数百尺。爪甲鋒穎のごとく、空より水精を拏攫し、却つて井に入りて去る。左右懼慄し、敢へて近づき睹す。但だ邯は其の水精を悲しみ、沢は其の宝剑を失へるを恨む。

逡巡にして、一老人有り。身に褐裘を衣ひ、貌甚だ古朴なり。而して沢に謁して曰く、「某は土地の神なり。使君何ぞ容易にして其の百姓を軽んずるか。此の穴の金竜は、是上玄の使者にして、其の瑰壁を宰し、一方に沢潤あらしむ。豈に一微物を信ずる有りて、睡りしに因りて之を劫はんと欲するか。竜忽ち震怒し、神化を作用すれば、天関を揺るがし、地軸を擺ひ、山岳を擡ちて丘陵を碎き、百里を江湖と為し、万人を魚鼈と為すに、君の骨肉焉くんぞ保つべけんや。昔者鍾離は其の宝を愛せず、孟嘗は自ら其の珠を返す。子之を効さず、乃ち其の貪婪の心を肆にし、縦に猾鞞の徒をして、宝を取らしめて憚ること無し。今已に其の軀を啖ひて其の珠を鍛へり」と。沢赧恨して、詞無くして対す。又た曰く、「君須らく火

急に過を悔ひて禱るべし。甚だ怒らしむる無きのみ」と。老人俟ち去る。沢遂に牲牢を具へて之を奠る。

〔語注〕

○周郎 未詳。両『唐書』には見えない。なおこの話とほぼ同じ話が『太平広記』卷二百三十二「器玩」部に「周郎」（出『原化記』。中華書局本は「明鈔本作出『録異記』。『類説』三十二引作出『伝奇』。」と注す）として収められている。○彝 少数民族の名。「羅羅」「盧鹿」「羅落」など多くの異称がある。もと東チベットの北部山地ないし以北の地に居住していた古羌から出たと言われ、一部が唐初に雲南地方に南詔王国を建てた。

現在も中国西南部に多く居住している。一部の部族は近代まで奴隸制度を持っていたことでも知られる。○江陵 現在の湖北省荆州市辺り。かつての楚の都郢がここにあり、繁栄を誇った。

○瞿塘艷瀨 「瞿塘」は長江の上流、重慶市奉節県の東にある峡谷。巫峡、西陵峡とともに三峡の一つ。「艷瀨」は「濫瀨」に同じく、瞿塘峡の入り口に屹立する大岩の名。この附近は流れが激しく、舟の難所とされる。○江都 現在の江蘇省揚州市附近。○牛渚磯 現在の安徽省馬鞍山市の長江東岸。「采石磯」とも言う。○温嶠執犀照水怪之瀆 温嶠が牛渚磯の水中から音楽が聞こえてくるのを不審に思つて犀の角に火を付けて照らしたところ、奇怪な容貌をした者がいた。その夜、温嶠は「何故よその世界をのぞき見たのか。」と言われる夢を見て、程なく亡くなったという。『異苑』卷七「燃犀照渚」に「晉温嶠至牛

渚磯、聞水底有音樂之聲。水深不可測、傳言下多怪物。乃燃犀角而照之。須臾、見水族覆火、奇形異狀、或乘馬車著赤衣幘。

其夜夢人謂曰、「與君幽明道隔、何意相照耶。」嶠甚惡之、未幾卒。」(晋の温嶠牛渚磯に至り、水底に音樂の声有るを聞く。

水深きこと測るべからず、下に怪物多しと伝言す。乃ち犀角を燃やして之を照らす。須臾にして、水族火を覆ひ、奇形異狀、或いは馬車に乗りて赤衣幘を著くるを見る。其の夜夢に人謂ひて曰く、「君と幽明道隔たるに、何の意ありて相照らすか」と。嶠甚だ之を惡み、未だ幾ならずして卒す。）とある。○王澤 未詳。『原化記』「周郎」は「邵澤」に作る。○相

州 現在の河南省安陽市と鶴壁市、河北省邯鄲市の南部を併せた地域。なお『原化記』「周郎」では八角井は汴州（現在の河南省開封市全体と新郷市の南部を併せた地域）にあることになつている。○九陽 日照り。○鋒穎 矛先。○擊攫 つかみあう。○懾慄 「懾」「慄」ともにおそれる意。○逡巡 極めて短い時間。○褐裘 「褐」は葛や麻で織つた粗末な衣、「裘」はかわごころも。転じて、質素な衣服。○上玄 天のこと。揚雄「甘泉賦」（『文選』卷七）に「惟漢十世、將郊上玄。」（惟れ漢の十世、將に上玄を郊らんとす。）とあり、李善注に「上玄、天也。」（上玄は、天なり。）とある。○瑰璧 大きな宝玉。「瑰」は優れた、大きい意。○澤潤 うるおす。恵みを施す。○天關 星の名。ここでは、地上と天界を繋ぐ関所を言うか。○地軸 大地を支えていると考えられていた心樁。○萬人爲魚鼈

都市が水没してしまい、人々が溺死することを言うか。第22話「沙州黒河」の「魚其族」注を参照。○鍾離不愛其實「鍾離」は後漢の鍾離意のこと。清廉潔白な役人として知られる。交趾太守張恢が不法に財を蓄えていたのが発覚・処罰され、その財産は群臣に分賜されることになったが、鍾離意はそんな穢れた宝は受け取れぬと辞退したという。『後漢書』卷四十一「鍾離意伝」に「時交趾太守張恢、坐臧千金、徵還伏法。以資物簿入大司農、詔班賜群臣。意得珠璣、悉以委地而不拜賜。帝怪而問其故。對曰、「臣聞孔子忍渴於盜泉之水、曾參回車於勝母之間、惡其名也。此臧穢之寶、誠不敢拜。」帝嗟歎曰、「清乎尚書之言。」乃更以庫錢三十萬賜意。」(時に交趾太守張恢、千金を坐臧し、徵還せられて法に伏す。資物を以て大司農に簿入し、詔ありて群臣に班賜す。意珠璣を得るも、悉く以て地に委てて拜賜せず。帝怪しみて其の故を問ふ。對へて曰く、「臣聞くならく孔子の渴を盜泉の水に忍び、曾參の車を勝母の間に回らすは、其の名を惡めばなり。此の臧穢の寶、誠に取へて拜せず」と。帝嗟歎して曰く、「清なるかな尚書の言」と。乃ち更めて庫錢三十万を以て意に賜ふ。)とある。○孟嘗自返其珠「孟嘗」は後漢の孟嘗のこと。合浦は真珠の産地であったが、歴代の太守が利を貪った為に真珠は皆よそに遷ってしまい、街は寂れた。孟嘗が太守に着任して善政を布くと、一年経たないうちに真珠が戻ってきて、街は再び活気を取り戻したという。『後漢書』卷七十六「循吏伝・孟嘗」に「嘗後策孝廉、舉茂才、拜徐令。

州郡表其能、遷合浦太守。郡不產穀實、而海出珠寶、與交址比境、常通商販、貿糶糧食。先時宰守竝多貪穢、詭人採求、不知紀極、珠遂漸徙於交址郡界。於是行旅不至、人物無實、貧者餓死於道。嘗到官、革易前敝、求民病利。曾未踰歲、去珠復還、百姓皆反其業、商貨流通、稱爲神明。」(嘗後に孝廉に策し、茂才に挙げられ、徐令を拜す。州郡其の能を表し、合浦太守に遷る。郡穀実を産せず、而るに海珠宝を出せば、交址の比境と、常に商販を通じ、糧食を貿糶す。先時の宰守並びに多く貪穢にして、人を詭りて採求すること、紀極を知らず、珠遂に漸く交址の郡界に徙る。是に於いて行旅至らず、人物に資無く、貧者道に餓死す。嘗官に到り、前敝を革易し、民の病利を求む。曾て未だ歳を踰えずして、去珠復た還り、百姓皆其の業に反り、商貨流通し、稱して神明と爲す。)とある。

○貪婪 欲張り。「婪」は特に食物を貪ること。○猾黠 義未詳。「猾」は悪賢い、「黠」はしなやかの意。黄氏巾箱本は「猾勒」、四庫全書本は「奸猾」に作る。後掲の前野氏訳は「悪がしこい者」とする。○鍛 ここでは「磨」に同じ。○傳奇

晩唐・裴鉞が編纂した小説集。既に佚して伝わらない。「崑崙奴」「聶隱娘」などの話で知られる。この話は「水精」と題して前野直彬『六朝・唐・宋小説選』(中国古典文学大系 平凡社 一九六八年)に収められている。

〔訳文〕

貞元年間(七八五〜八〇五)、処士の周郡は教養ある豪快の

士であった。葬人が奴隷を売っているのを見ると、年の頃は十四、五歳、容貌はとても賢そうだった。平地を歩くように泳ぐことができ、水に潜らせると、丸一日経つても全く苦しまず、「蜀の谷川や淵には行けないところはありません。」とのことだった。邯はそこで彼を買い取り、名を「水精」と改めた。彼の能力を類い稀なものと思えたからである。

邯は蜀から舟に乗って三峡を下った。江陵へ行くこうとして、瞿塘の艶瀨を経過した。そうして水精を潜らせてその深みを見に行かせた。水精は水に入ると、しばらくして出てきた。沢山の金銀の器物を探し出してきたので、邯は大層喜んだ。それからは船を淵に繋ぐ度に水精に潜らせたと、手に入れるものがあった。

流れに従って江都へ行く時、牛渚磯を経過した。ここは昔から最も深いところであると言われており、温嶠が犀の角を焼いて水怪を照らした水辺であった。また水精を潜らせると、しばらくして宝玉を探し出してきた。水精は「口では言い表せぬ程水怪が居りました。どれも目を見開いて手を戟の形に曲げておりましたが、私は何とか禍いを逃れることができました。」と言った。これによって邯は金持ちになった。

数年後、邯の友人王沢は相州の刺史をしていた。邯は河北に行つた際、彼を訪問した。沢は大層喜び、一日と空けずに遊び楽しんだ。そして一緒に相州の北隅にある八角井に行った。これは天然の盤石でできているが、石畳が八角形になっている。

広さは三丈（九、三三m）余り程であった。明け方と日暮れに霧が盛んに涌き出して、百歩（一五五、五m）余りに立ちこめた。月のない晦日の夜には、炎のような紅い光が発して千尺（三一一m）の高さまで届き、昼間のようにはっきり物が見えた。

土地の古老は「この井戸の底には金竜が潜んでいる。日照りの際に祈禱を行えば、大変靈驗あらたかである。」と言い伝えている。沢は「この井戸にはきつと素晴らしい宝物があるに違いない。ただそれが本当かどうか確かめる手段が無いのだ。」と言った。邯は笑って、「簡単なことだ。」と言った。そうして水精に「お前は私のためにこの井戸の底まで潜って、どんな怪異があるか見て来い。沢もきつと褒美をくれるに違いないぞ。」と命じた。水精はしばらく水に入っていないので、うれしそうに服を脱いで井戸に潜った。

しばらくすると水精が出てきて、邯に「とても大きな黄竜が一頭居りました。鱗は金色のようで、真珠を何粒か抱いて眠っておりまして。私はこれを奪い取ろうと思ったのですが、身に寸鉄も帯びておりませんでしたので、その竜が突然に目を覚ましてはと恐れ、手を出しかねました。鋭利な剣を一振りお与え下されば、もし竜が目を覚ましたとしても、きつと遠慮無く切り捨ててしましましょう。」と言った。邯と沢は大層喜んだ。沢は「私がつ持っている剣は、世にも稀なる宝だ。お前はこれを持って行って真珠を奪うのだ。」と言った。水精は酒を飲んで剣を横たえて水に入った。

しばらくすると周囲の見物人は人垣をなした。突然、水精が井戸の水面から数百歩（一步＝一・五五五m）飛び上がった。続いて長さ数百尺（一尺＝三一・一cm）の金竜が姿を現した。

その爪は矛先のように、空から水精をわしづかみにして井戸の中に戻っていった。辺りの人々は恐れおののき、近づいて見ようという者は無かった。しかし邯は水精がいなくなったことを悲しみ、沢は宝剣を失ったことを残念に思っていた。

暫くすると、粗末な身なりで古めかしい容貌の老人が現れた。そして沢に拝謁して、「儂はこの地の神である。領主殿にあっては、何故軽々しく領民を軽んじるのか。この穴の金竜は天界の使者にして、宝玉を守つてこの地に恵みをもたらしている。

つまらぬ物を持ち、金竜が眠っているのを良いことに宝玉を奪おうというのか。金竜が突然怒り、神通力を發揮すれば、天の関所を揺るがし、大地を支える心棒を振るわせ、山を放り投げて丘を砕き、百里四方を湖と化し、万人を魚や鼈に変えてしまふのだから、そなたの一族だけがどうして無事でおられようか。その昔、鍾離意は宝物など気にもかけず、孟嘗は自ら真珠を戻つてこさせた。そなたは斯様な行いもなさず、何と貪欲な心のままに悪賢き者に勝手に宝を奪わせて憚らぬとは。金竜は既に賊の体を喰らつて、真珠を磨いているぞ。」と言った。沢は恥ずかしさに真っ赤になりながら悔やみ、言い返す言葉もなかった。また老人は「そなたは火急に過ちを悔いて祭祀を行わねばならぬ。金竜をあまり怒らせてはならぬぞ。」と言ひ、た

ちまちま去っていった。王沢はそこで生け贄を用意して金竜を祀った。

（続）

元原稿製作者・編集担当者

◎屋敷 信晴

項 青

○福本

睦美

西田 則子

山下

宣彦

永井

真平

平山 千加子

（○は編集担当者、◎は編集責任者）